



寺本 明, 長村 義之●編

『下垂体腫瘍のすべて』

書評者

森 昌朋 (群馬大大学院教授・内科学)

脳腫瘍患者ではその占拠性病巣のために、脳細胞障害による種々の脳機能低下が生ずる。一方、下垂体腫瘍は脳腫瘍に属するが、下垂体には種々の内分泌ホルモン産生細胞が局在する特徴を有することより、下垂体腫瘍患者では下垂体由来のホルモン過剰分泌による下垂体機能亢進症を呈することが多い。また、逆に非機能性下垂体腫瘍の増大により下垂体に局在するホルモン産生細胞が圧迫障害され、下垂体機能低下症が発見される患者も存在する。下垂体細胞由来のホルモンとしてプロラクチン (PRL), ACTH, GH, LH, FSH, TSH, Oxytocin, ADH などが挙げられ、下垂体から分泌されたこれらのホルモンは末梢血中に放出されて、全身に分布する標的臓器に達して生理作用を発揮する。また、これらの下垂体ホルモンは視床下部に存在する視床下部ホルモンによって、合成と分泌が制御されている。下垂体ホルモンのなかで生命維持に必要なホルモン

は ACTH と TSH であるが、他のホルモンも日常の恒常的機能維持には必須であり、下垂体ホルモン分泌の過剰や低下により種々の症状や臨床所見が生ずる。また、下垂体機能亢進症を惹起する最も頻度の高い腫瘍は PRL 産生腫瘍である。剖検時に下垂体検索を行った報告によると、腫瘍径が 1 cm 未満の microadenoma を含めた際の PRL 腫瘍の女性での発見率は 25% 以上の頻度であるという報告がなされており、日常の一般臨床を行う上でも、下垂体疾患は大変身近な存在であると言える。

さらに、わが国において最近、間脳下垂体腫瘍に基づく下垂体機能障害は特定疾患医療給付の対象疾患として認定された。このことは、下垂体疾患に悩む患者さんにとっては朗報であり、診療現場に携わる医師にとっては治療が行いやすくなった利点がある。一方、その反面医師は、下垂体疾患に関する update を常に把握して臨床にあたる責

任も課せられている。

上記に述べた事柄が背景としてありながら、下垂体腫瘍に関しての、病理から始まる総括的な病態と疾患の臨床的鑑別と治療を update に網羅した本はわが国ではこれまでになかった。このたび、日本医科大学・寺本 明先生、東海大学・長村義之先生の編集により上梓された本書は、65 項目、472 ページ、執筆者 85 名に上る大著となったが、その記述は下垂体腫瘍の基礎から臨床までを網羅するまさにわが国における下垂体腫瘍の決定版ともいえるべきものである。本書は、下垂体疾患の臨床を行う上でも、また下垂体研究に携わる上でも非常に有益な書となることは間違いなく。

A4 頁 472 2009 年 医学書院刊
定価 21,000 円 (本体 20,000 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00830-3]

